

## 『神代石之図』と関西大学博物館所蔵資料：弄石家収集資料の流転

著者	徳田 誠志
雑誌名	関西大学博物館紀要
巻	5
ページ	79-101
発行年	1999-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/16552">http://hdl.handle.net/10112/16552</a>

# 『神代石之図』と関西大学博物館所蔵資料

—— 弄石家収集資料の流転 ——

徳田 誠志

## 一・はじめに

「神代石（じんだいせき）」という言葉があった。もちろん今日、一般の辞書には掲載されておらず、考古学界でも学史を語るとき以外に用いられることは少ない。よって知る人も多くないと思われるので、この神代石とは何かを、まず記述しておこう。

江戸時代中期、おおよそ一七世紀の後半に、「石」を蒐集すること  
に一生を費やした一人の人物がいた。その名を木内石亭という。彼は、  
古今東西の珍しい石を蒐集した。その中には鉱物、化石に混じって、今  
日の考古学でいう石器、石製品の類も含まれていた。彼は、長年の石を  
見ることよって培った観察眼をもって、蒐集した石の中から石器、石  
製品を抽出した。そしてこれらの石が、自然石とは違い人が使用したも  
のであるとの考えを導いた。さらにこれらの石が神代（かみよ）の時  
代に用いられたものであると考えたことから、「神代石」と命名した  
ものであると考えられている。

石亭の活動は、弄石家と呼ばれた同好の人々よって弄石社という組  
織的な活動になり、全国的な拡がりを見せる。すなわち、一個人の趣味  
という範疇では捉えきれないものがある。これらの活動は、江戸中期と  
いう円熟しつつある社会状況を背景として芽生えてきた、町人層による  
学問隆盛の中に位置づけられる。そしてまた、石の蒐集・研究は、津島  
恒之進（如蘭）らよって確立されはじめた、物産学の一分野としての  
理解もできよう。

石亭をして考古学の祖とする指摘や、同好の木村兼霞堂らの蒐集活動  
をもって、わが国の博物館活動の萌芽として位置付けようという研究成  
果も首肯できるところである。しかしながら、彼らの活動が次代へ引き  
継がれず、社会に定着しなかったところに活動の限界を見ることもでき  
る。

そしてまた、蒐集した遺物から当時の人間活動の復元をしていくとい  
う考古学的な視点を欠いていた。神代石の各名称に付けられた「雷」「天  
狗」などの語句からして、彼らの神代石に対する扱いが奇異なもの、不  
思議なものとして理解している姿勢が読みとれる。当時考古学という学

問概念が存在しない以上至極当然なことではあるが、石亭の研究成果が改めて評価されるためには、長谷部言人氏によって取りあげられる昭和初期を待つ必要があった。<sup>①</sup>石亭の業績を評価する一つとして、彼は神代石を単に奇異なものとせず、『曲玉問答』などの著作に見られるように、今日の考古学的な視点を持ち合わせていたことがあげられよう。

石亭の蒐集品は今日ではほぼ散逸してしまっており、その原型を見ることはできない。これは兼葭堂によって形成された、石のみではない、物産学全般にわたるような膨大な蒐集品についても指摘できる。兼葭堂の居宅にあふれんばかりに、そしてまたきちんと整理されていたと思われる蒐集品も、あくまでも個人コレクションであり、彼の死後は散逸してしまっている。この点が個人による活動の限界であり、彼の邸宅が今日の博物館的な機能があったにせよ、その機能が十分には熟していなかったことを物語る。

これらのことは前稿でもやや触れているので、詳述することは避け、小稿の目的について記述しておく。

平成八年初夏、東京本郷の古書店目録に一卷の卷子本が掲載された。それが後述する『神代石之図』上巻であり、大学当局のご理解を得て、関西大学図書館が所蔵することとなった。小稿ではまずこの卷子本を紹介することを第一義とする。また、原本及び、今日までに確認できた写本を示し、『神代石之図』とは何かを紹介していきたい。さらには、この『神代石之図』に描かれている資料のいくつかが、現在関西大学博物館に所蔵されていることを確認した。さらに他にも江戸時代文獻の中に描かれている神代石のいくつか、本館の所蔵資料となっていることを

確認できたので、併せて報告しておきたい。これによって、関西大学博物館資料の形成過程の一端を知ることができよう。

考古学を専門にする人間にとっては、卷子本を扱うこと自体が苦勞であるが、資・史料を公開すること第一目的として、記述していくことをご了承願いたい。

## 二、史料紹介 『神代石之図』上巻

### (1) 『神代石之図』の性格と類似の卷子本

本項では、関西大学図書館所蔵『神代石之図』上巻を見ていくこととするが、まず、この『神代石之図』をはじめとした、神代石を描いた図巻類一般(冊子本を含む)の性格について簡単に記述しておこう。

先に述べたように江戸時代中期(一七世紀中頃)に、木内石亭を中心とした弄石家と称される人々が全国各地に存在した。石亭を中核として各地に居住した人々の間で、自らの所蔵品についての意見交換、あるいは蒐集した神代石の交換などの情報がやり取りされた。近くに居住した人々の間では直接互いの居宅を訪問し、各自のコレクションを披瀝したようである。たとえば石亭は安永四年(一七七五)に、木村兼葭堂のもとを訪ね、兼葭堂の所蔵品を見学し、その感想を著書に記述している。また、現在の岐阜県高山市に居住した二木長嘯(長兵衛)は、天明七年(一七八七)に石亭のもとを訪れている。

このように互いに訪問することもあったが、遠く離れた弄石家との間では、手紙のやり取りとともに自ら所蔵する神代石を図に描き、その

半紙をそのまま、あるいは卷子本に仕立てて情報の交換を行ったようである。また実際に訪問する際にも、自らが所蔵する神代石を持参することは不可能であり、図に描いたものを携帯したようである。このことは今日まで小形の卷子本がいくつか残されており、これらは携帯用であると考えられていることから指摘されている。

このように『神代石之図』とは、現在の博物館図録のような性格を持ったものといえるのではなからうか。そして今日のような出版という形が取られなかったために、弄石家の間で順次書写され、写本が流布していくことになる。そのいくつかが今日まで伝えられてきており、個人蔵のものも多いが、各地の図書館・史料館にもいくつかが収められている。そして極めて稀なことと思われるが、古書店の販売目録に掲載され市場に出まわることがある。

『神代石之図』がいわば博物館図録のような性格であるとして記したが、類似した図巻類は、当然石亭らが活躍した江戸中期に集中して作成された。その代表的なものが、今回取りあげた『神代石之図』であるが、同じような卷子本をいくつか紹介しておきたい。

神代石研究の集大成としては、石亭の『雲根志』であるといつて過言はないが、そのうちの享和元年（一八〇一）に出版された三編に、『諸家所蔵神代石図』が付録として付けられている。これは石亭が本文に示した神代石を所蔵者別に編集したものであり、石亭が『雲根志』を執筆したときの資料であるといえる。この図録に収められたものが、当時の代表的な神代石として知られていたものであるといえよう。よって『神代石之図』と『諸家所蔵神代石図』が石亭によって編纂された図巻の代

表といえる。

その他の系統の図巻としては、極めて大雑把な分類であるが二木長嘯の蒐集品を写生した卷子本『石器図』と、越後に居住した河倉亭と称した渾川平四郎の蒐集した神代石を載せる『上古石器図巻』の二系統が存在する。

前者は飛騨に居住し、近隣の縄文時代遺跡出土の石器を中心として蒐集活動を行っていた、長嘯の蒐集品が描かれている。彼の蒐集品は、卷子本とともに、今日まで子孫宅に伝えられている。このように現物の神代石と、その図巻が残されている例は極めて貴重であり、現在は重要文化財に指定され、高山市郷土館にて見ることができている。弄石家の蒐集品が死後散逸してしまうことが一般的であると先述したが、その中で長嘯の蒐集品は、家業の酒造業が今日でも営まれているように、二木家代々の当主によって守られてきたものであろう。さらには飛騨という狭い盆地の中に、独自の町人文化を咲かせた土地柄という地理的・文化的な環境が、遠因として働いているのではなからうか。なお、長嘯の所蔵品は『神代石之図』の一部にも掲載されている。

後者は越後頸城郡に居住した、河倉亭の蒐集品を描いたものである。河倉亭は近年の研究によって、渾川平四郎に比定されている<sup>⑧</sup>。越後地方も飛騨と同じく縄文時代の遺跡が多く、必然的に縄文時代石器を中心としたコレクションが描かれている。越後には、石亭とともに弄石家の中心的な活躍をした、澁華井甘井と称した鈴木一保に比定されている人物が居住するなど、神代石蒐集熱が高い地域であった。澁華井甘井は石亭の調査・研究活動の共同研究者、あるいはよき支援者であり、『神代石

之図』の跋文には自ら石亭の求めに応じて、神代石を浄写したことが記述されている。この河倉亭の蒐集品の一部が、神田孝平の手を経て関西大学博物館に所蔵されているので、詳細は後述することとしたい。

もちろんこの二系統以外にも、神代石を描いた史料(図巻類)はいくつも存在する。藤貞幹の著した『集古図』にも、石斧と考えられる図がいくつか掲載されている。清野謙次氏はこれらの史料(図巻類)を検討し、五系統の存在を示唆されている。<sup>⑤</sup> それぞれの系統に写本が存在し、また名品図録のように代表的な神代石を抜き出して編纂されたと思われる卷子本もある。写本自体は江戸年間はもちろん、明治時代においてもいくつかがつくられたようである。神田孝平自身もいくつか写本を製作し、所有していたようである。これらの卷子本あるいは冊子本に掲載されているすべての神代石を検討していないが、これらを集成すれば、少なくとも江戸時代に知られていた神代石の全容をつかむことはできよう。

## (2) 関西大学所蔵『神代石之図』上巻について

江戸時代に描かれた神代石を載せる卷子本がいくつか存在することを述べたが、今回関西大学図書館に所蔵された『神代石之図』上巻(以下、関大本と記述)を紹介していこう。

関大本は美濃紙大の和紙をついだ卷子本であり、天地二九・八cm、長さ約一〇m九〇cmを測る。次に示す写本が上・下に分かれているように本来は全二巻からなるものである。前述したように東京本郷の古書店から購入したものであり、古書店に入手先を問い合わせたものの、来歴は不明であった。

いわゆる表紙はなく、紐も付けられていない。本文と同じ和紙のまま卷子本に仕立てられている。将来的には表紙を付けるなどの表装を必要としよう。

さて、内容であるが冒頭に木内石亭による序文が記されている。序文は既に斎藤忠氏によって釈文が発表されている。参考までに全文を掲げておく。<sup>⑥</sup>

「予奇石を翫ぶ事多年、同好の土国々に多く、おのおの秘蔵する所の神代石あり。今真図を模写し、後来同好の奇観にまたんとす。是皆無名の奇石にして、天工にあらず、人工にあらず、実に神工のいちじるしきものなり。此たぐひ雷斧石弩あり。又形小くして奇なる物ありといへども、其品多き故にはぶきて写さず。されども、石劔頭の奇古なる、しりへに付てこれを記す。予の奇石を翫ぶ時に至て、かゝる奇石の世にあらはるるは、予の時を得たるかとはじめに記す。」

## 湖東 石亭主人自序

短い文章ではあるが、石亭の神代石に対する思いが滲み出ており、最後の一文は、自らが生涯をかけて石の研究に没頭してきた事への、自負心のあらわれと読むこともできよう。また、小形の神代石は収録せずに、いわば名品のみを掲載したという編纂の姿勢も読みとることができよう。

この序文に続いて、合計五二点の神代石が掲載されている。それぞれの神代石は図版1~4に写真を掲載した。また、添えられている記事については表1~4にまとめた。なお、番号は冒頭から適時筆者が付けたものであり、記事についても関大本で明らかに欠落していると判断でき

たものは、他の写本から補っている。

さて、この一覧表によりながら内容を見ていこう。まず描かれている神代石の内容であるが三種に大別できる。第1類は、縄文時代に属すると考えられる石器類（独鈷石・石棒・石冠・石剣・石斧・石槌）である。第2類は、古墳時代前期の古墳を中心に副葬された石製品（石釧・車輪石・鍬形石）である。第3類としては、考古遺物としては疑問があるものに大別できる。そのなかには、前稿で紹介したような贗物も含まれている可能性が高いと考えている。もちろんすべてが贗物か否かは、絵図面という限界があり、判断できないものも多い。

その他、変わったものとして、長嘯所蔵品の中のNo. 37に示した石帯に取り付けられた巡方がある。

このように見てくると、石亭が神代石と分類したものが明確になってくる。すなわち、石鍬・石匙（天狗飯匙）等のように、石亭が用途を理解し得たと考えたものは、神代石には含まれていない。同様に勾玉（曲玉）などの玉類も含まれていない。よって、神代石とは今日の石器・石製品の考古遺物全般を指すものではなく、用途がよくわからないものを総称していることが窺える。

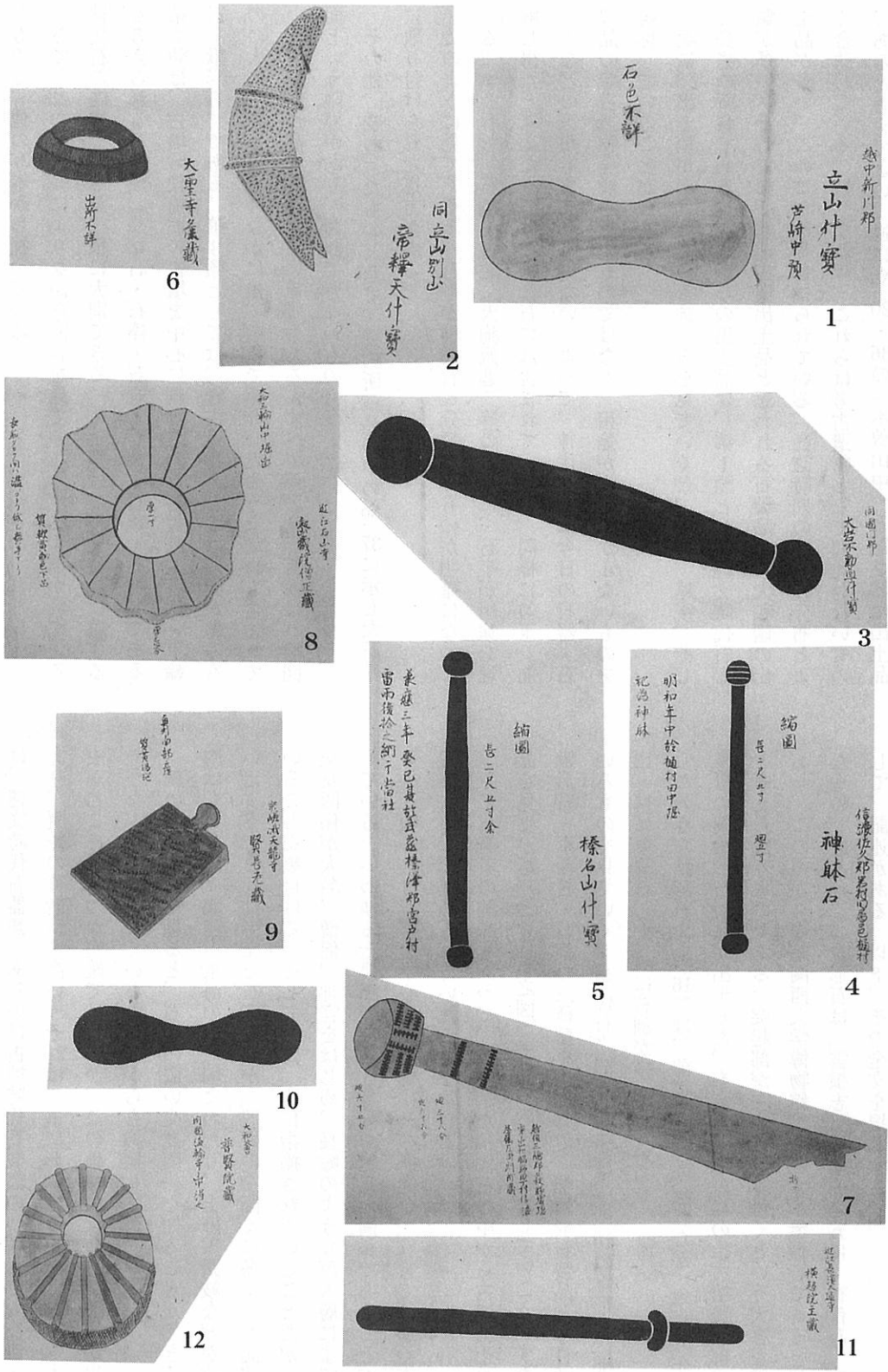
次に、出土地が記されている神代石を見ていくと、信濃、越後、そして長嘯の所蔵である飛騨国からの出土品は、第1類とした縄文時代石器類が多い。そして第2類の古墳出土品と思われる石製品は、大和国の出土品が多い。このことは今日知られている、当該時期の遺跡の分布とよく合致している。換言すれば、これらは考古遺物として間違いないものであると考えてよい。逆にNo. 20・36の「木曾山中」と記された出土品

は、縄文時代石器類、あるいは古墳時代石製品のいずれでもなさそうであり、贗物の可能性が高い。それは、単に形状のみからでなく、木曾山中がどこを指すのか明確ではないが、この地域には今日石製品が出土しそうな古墳が知られていないことから指摘しうる。

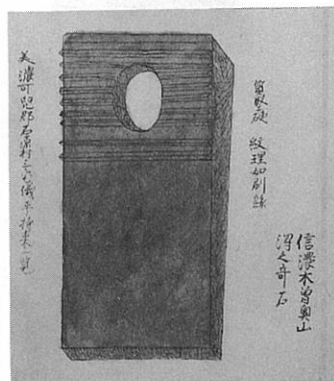
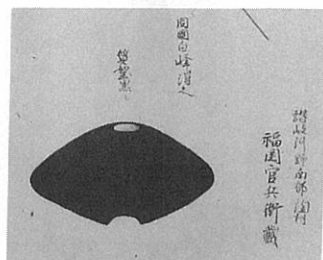
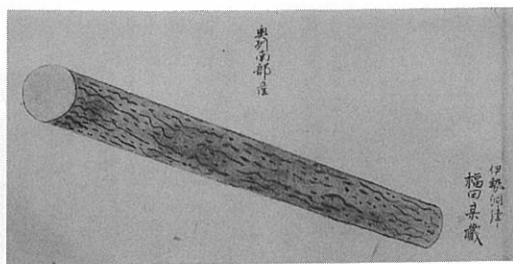
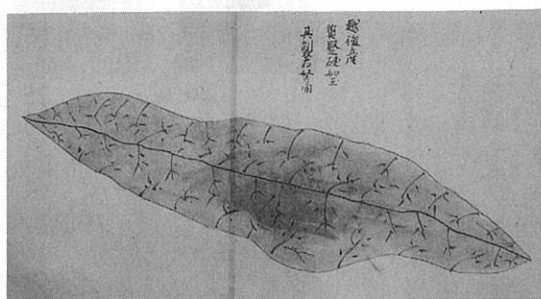
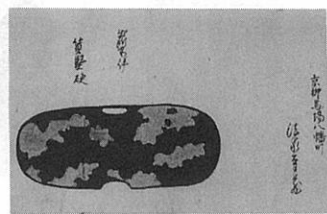
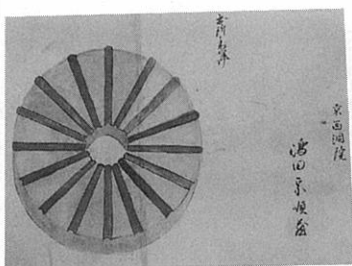
続いて所蔵者を見ると、石亭の広い交友関係を知ることができる。畿内はもとより、北陸、東海の十数国にわたり、上野、讃岐などが遠方といえよう。これは序文で石亭自身が「同好の土国々に多く」と記述していることを裏付ける。そしてまた、既に指摘されていることだが、その交友関係が大名、僧侶、神官をはじめ、長嘯のような町人層にまでわたっている。いわゆる士農工商という身分を越えた関係であることがわかる。このことは石亭を中心として神代石の研究が、官営ではなく市井の人々によって進められていたことを物語る。

さて、筆者の興味もあって、描かれた神代石の中から古墳出土の石製品を見ながら、『神代石之図』上巻の内容を紹介していこう。すなわち鍬形石・車輪石・石釧の三種類を総称して、腕輪形石製品と今日呼んでいるものを見ていく。『神代石之図』上巻では、No. 16に鍬形石、No. 8・12・14に車輪石、No. 6に石釧が描かれている。

このうち鍬形石（No. 16）は、前稿で詳しく触れたが、平成八年初夏、多量の腕輪形石製品が出土した、奈良県三宅町島の山古墳後円部出土品と考えられるものである。突起部が左側に取り付くという大きな特徴があり、この点から現在関西大学博物館が所蔵する鍬形石であると判断したものである<sup>⑥</sup>。この鍬形石は『雲根志』三編卷之五に「神代石 四」として、記述がある。以下、その全文を掲載する。<sup>⑥</sup>



図版1 『神代之石之図』(1) No. 1~No. 12 (縮尺不同)



図版2 『神代石之図』(2) No. 13~No. 24 (縮尺不同)





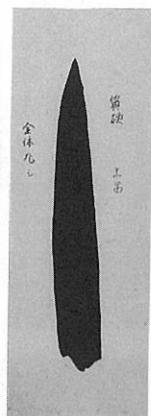
29



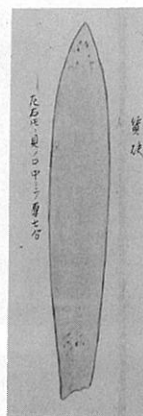
28



27



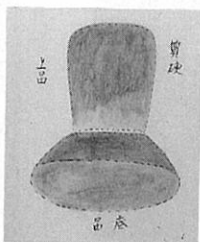
26



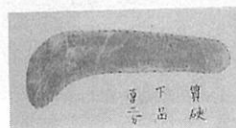
25



32



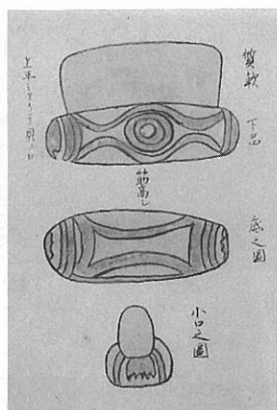
31



30



35



34



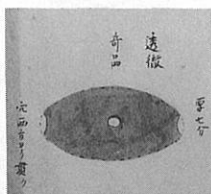
33



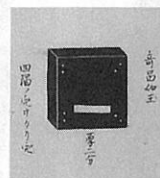
36



39

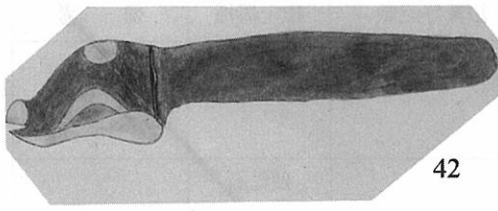


38

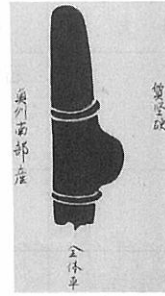


37

図版3 『神代石之図』(3) No. 25~No. 39 (縮尺不同)



42



奥門南部庄

管笠破

全休平

41



管笠破

40



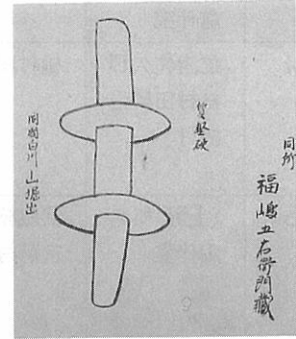
45



二品正出物不詳

信濃若村田  
吉澤夜五郎藏

44

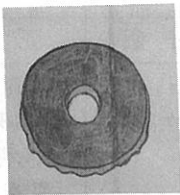


同前白川山流止

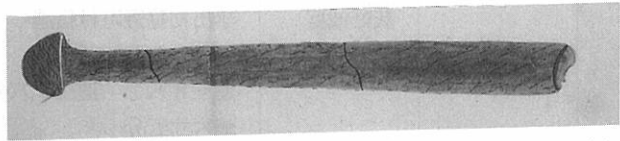
管笠破

同所  
福嶋五右衛門藏

43



48



46



管笠破

二品北御山門那山門村長末上吉澤治元年  
持付置及三十四月漢文

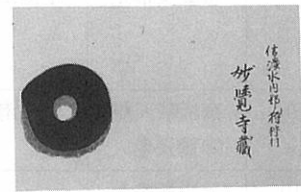
50



管笠破

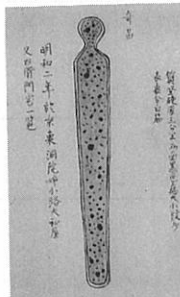
越中富山度陸  
池田嘉助藏

49



信濃若村田  
妙睡野寺藏

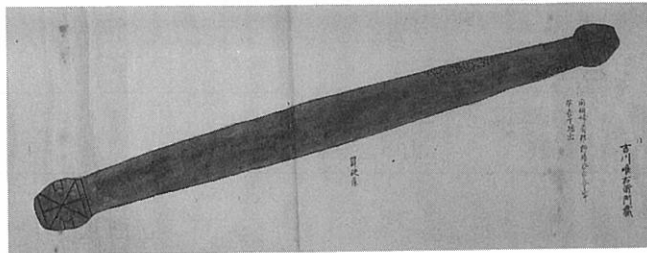
47



52

明和二年秋中東洞院神小幡人持寄  
又此筒開口也

信濃若村田  
吉澤夜五郎藏



管笠破

吉澤夜五郎藏  
同前白川山流止  
同前白川山流止

51

図版4 『神代石之図』(4) No. 40~No. 52 (縮尺不同)

番号	所 蔵 者	出 土 地	特 徴・法量等記載	推定器種	備 考
1	越中新川郡 立山什宝 芦崎中預	不 詳	石色不詳		「石色不詳」 東大本なし
2	同立山別山 帝釈天什宝			独鈷石	
3	同国同郡 大岩山不動 尊什宝			石 棒	
4	信濃佐久郡 樋村田属邑 樋村	樋村田中	明和年中於樋村田中 掘(出)祀為神体 縮図 長二尺五寸 廻五寸	石 棒 (神体石)	「出」天大本 あり
5	(上野)榛名 山什宝	武蔵棒澤郡 宮戸村	承応三年癸巳集武蔵 棒澤郡宮戸村雷雨後 拾納干當社 縮図 長二尺五寸余	石 棒	「上野」天大 本あり
6	大聖寺侯	出所不詳	二品	石 釧	
7	大聖寺侯	越後三島郡 萩野城墟	越後三島郡萩野城墟 穿出初脇野町村信濃 屋藤左衛門所蔵 廻三寸八分 廻三寸八分 廻六寸五分 質青瑪瑙 折口	石 棒 (欠損)	「質青瑪瑙」 は本来No.6 の説明 「質青瑪瑙」 東大本なし
8	近江石山寺 密蔵院僧正	大和三輪山 中掘出	質軟質黄白色 下品 表筋タカク間ハ溝ノコト ク低シ 裏ハ平ナリ 厚一寸厚三四分	車輪石	
9	京嵯峨天龍 寺賢長老	奥州南部産	質黄瑪瑙	不明	考古遺物 でない
10	近江長濱大 通寺 横超院主				No.1と同じ 器種
11	近江長濱大 通寺 横超院主			石劍(?)	
12	大和釜口 普賢院	同国法輪寺 山中之得		車輪石	

表1 『神代石之図』上巻 所収神代石一覧表(1)

13	京柳馬場 八幡町 法泉寺	出所不詳	質堅硬	不明	自然石か
14	京西洞院 嶋田宗順	出所不詳		車輪石	
15	京寺(町)御池 木瓜屋伏右衛 門	松前熊石産	厚壱寸	青龍刀石器?	「町」東大 本あり
16	浪華兼葭堂	大和虎隠村 山中得之	質青瑪瑙	鍬形石	前稿掲載
17	浪華兼葭堂	越後産	質堅硬如玉 其製石弩同	不明	
18	讃岐阿野南部 (郡カ)陶村 福岡官兵衛	同国白峰得 之	質如玉黒シ	不明	東大本、 天大本と も「郡」
19	伊勢洞津 福田某	奥州南部産		石棒?	
20	三宅儀平	信濃木曾奥山 得之奇石	美濃可児郡石原村 三宅儀平持来一覽 質堅硬 紋理如刷絲	不明	
21	飛騨高山 二木長兵衛	同国小坂村 掘出	質至堅剛 全体丸シ 奇品如玉	石棍棒	
22	二木長兵衛		質堅硬 少シ平ミアリ	独鉦石	
23	二木長兵衛		此方刃ノコトシ 此方ム子丸ミアリ 質堅硬	石劍 (欠損)	
24	二木長兵衛		質堅硬ニテ密ナリ 全体丸ク少シ 平ミアリ	石棒	
25	二木長兵衛		質硬 左右トモ貝ノ口 中ニテ厚七分	石劍か (欠損)	
26	二木長兵衛		質硬 上品 全体丸シ	石劍か (欠損)	
27	二木長兵衛		質硬 中品	石冠	
28	二木長兵衛		質如玉 至品 底品(凹カ)	石冠	東大本 「凹」
29	二木長兵衛		質硬 中品	石冠	
30	二木長兵衛		質硬 下品 厚二分	石刀か	

表2 『神代之図』上巻 所収神代石一覽表(2)

31	二木長兵衛		質硬 中品 底品(凹カ)	石冠	「底品」東大 本なし 天大本「凹」
32	二木長兵衛		質硬 上品 磨肌 中ニテ厚一寸 廻り貝ノ口	磨製石斧	
33	二木長兵衛		質硬廉 下品 此方貝ノ口 此所ニテ厚一寸四分	不明	
34	二木長兵衛		質軟 下品 筋高シ 上平ミアリテ貝ノ口 底之図 小口之図	石冠	
35	二木長兵衛		上品	石棒	
36	二木長兵衛	信濃木曾山中 得之	上品		「上品」 東大本無し
37	二木長兵衛		奇品如玉 厚二分 四隅ノ穴サクリ穴	石帯か (巡方)	
38	二木長兵衛		透徹 奇品 厚七分 穴両方ヨリ貫ク	不明	
39	二木長兵衛		上貝ノ口ニアラズ 平ナリ	石冠か	
40	二木長兵衛		質堅硬	石冠	
41	二木長兵衛	奥州南部産	質堅硬 全体平ミアリ	独鈷石 (欠損)	
42	二木長兵衛			獸頭石棒	
43	同所 福島 五右衛門	同国白川山掘 出	質堅硬	独鈷石	着色なし
44	信濃岩村田 吉澤彦五郎	二品トモ出所 不詳		石棒	
45	信濃岩村田 吉澤彦五郎			石棒	
46	信濃水内郡 ト(戸)狩村 妙覚寺			石棒	
47	信濃水内郡 ト(戸)狩村 妙覚寺			不明 (紡錘車か)	

表3 『神代石之図』上巻 所収神代石一覽表(3)

49	越中富山 侯臣 池田嘉助		質硬	石冠	加助か 天大本 「加」
50	越中富山 侯臣 池田嘉助		質硬 二品共飛騨白川郷 白川村兵太ト云者萬治元 年ヨリ持傳寛政七年四月 得之	独鈷石	
51	同吉川 唯右衛門	同国婦貞郡野積谷 市谷山中華表下 掘出	質硬廉	石棒	
52	同吉川 唯右衛門	出羽莊内之山中 拾得之奇石	奇品 質堅硬厚三分半 両面黒色痣大小数多 表裏合白筋 明和二年於京東洞院 姉小路大和屋又右衛門 宅一覽	不明	

表4 『神代之図』上巻 所収神代石一覽表(4)

「安永四年乙未八月廿八日、浪華に遊で、兼葭堂を訪ふ。主人奇石を翫ぶ事年あり。此頃神代石一つを得たりとて見せらる。古今数なき奇石なり。その形状鍬がたの如く、長さ七寸中四寸ばかり。末は薄くして三五分、本せばく末ひろし。本の方に二寸に一寸ばかりなる一穴あり。表裏に高く筋を彫上たり。全体青瑪瑙にて、奇なり。美なり。愛するに堪たり。玉工の及ぶ所にあらずして、其根源は彫刻の物なり。先に述る濃州三宅氏が鍬形石と同物にて、至つて上品にして形また異なり。古代神工の物にていかなる物ともしる人なし。大和国唐院村の山中にて狐の穿出せりと。又奇ならずや。形図のごとし。」

この文中にある「濃州三宅氏が鍬形石と同物にて」とあるものは、No. 20に掲載されている神代石をさすものと思われる。このNo. 20については、写真に示したとおり本物の鍬形石とは思われない。先にも記述したように出土地が木曾山中とあり、形状だけでなく、出土地からも疑いが持たれるものである。別稿でも指摘したように、神代石蒐集熱が高まるとともに、奇石商と称する人々が輩出し、弄石家に神代石を販売していたようである。石亭の記録にも奇石商から購入した史料が残されている。奇石商が扱ったものすべてが贋作であるとはいえないが、神代石が商品として扱われはじめた時点で、贋作がつけられる余地が産まれたといえよう。

贋作の問題は別稿に譲るが、江戸時代に認識されていた真の鍬形石と思われる神代石は、この兼葭堂が所蔵していたもの一点に限られるようである。

次に車輪石であるが、上巻に三点、そして後述する下巻に一点の四点が掲載されている。このうち三点が『雲根志』に掲載されているのでその記事を引用する。<sup>⑧</sup>

「上古の神物、神作なり。何たるものともしる人なし。其形状丸く或ハ飯櫃なり。あるひは平にして中厚く、端は薄し。大さ指渡し三寸、或ハ五寸、或ハ八九寸。色薄白く木理ありて木の化せしに似たり。菊花のごとくに彫て中に一の穴あり。今の茶台、盃台の形にして、穴のさしわたし二寸ばかりあり。甚稀なるものなり。」(後略)

この説明文とともに大和普賢院所蔵品(神代石之図上巻No. 12)、京都島田宗順所蔵品(同上巻No. 14)、石亭所蔵品(神代石之図下巻)が掲載されている。このうち普賢院所蔵品の出土地は『雲根志』では「法隆寺山中」となり、『神代石之図』上巻では「法輪寺山中」とある。図を見る限り同じものを指していると見て間違いなく、どちらが正しい出土地を示しているかは不明である。その他出土地が明らかなのはいずれも大和(奈良県)内から出土したことを伝えている。また、絵図を見る限り本物の車輪石と見て間違いなさそうなものである。ただ先の鍬形石とは異なり、出土した古墳を特定することはできない。

描かれている車輪石と、今日残されている実物を同定する作業は、車輪石に特徴が少ないだけに困難である。可能性がある遺物としては、現在石山寺が所蔵する資料の中に車輪石一点を認めることができ、これがNo. 8にある車輪石の可能性がある。

石釧はNo. 6に一点のみが掲載されている。『神代石之図』以外の図巻類においても、管見による限り石釧と判定できる神代石は本例のみであ

る。描かれた石釧は薄緑色（写本によっては深緑色）に着色されており、外斜面・外側面ともに細刻線が施された状況を知ることができる。今日の型式学的な考察からすれば、古相を示す石釧といえよう。出土地は不詳であり、現在実物が残されているかは不明である。

この石釧の所蔵者である大聖寺侯とは、加賀大聖寺藩前田氏を指しているものと考えられ、石亭と同時代の藩主となると、第五代利通もしくは第六代藩主であろう。彼はNo. 7の石棒も所蔵しており、神代石蒐集熱が民間だけでなく、武家階級にも及んでおり、その学問を通じて石亭との交流があったことが知られる。

名称については、「石釧」とはなっておらず、別の卷子本には「神製御饌石」と記されている。用途が釧であろうと想定されるに至ったのは大正年間のことであり、江戸時代に石釧の名称が付けられていないことは当然である。

以上、石製品を概観しながら、『神代石之図』上巻の内容を紹介してきた。このことから『神代石之図』という史料の有効性と、限界が指摘できる。有効性については、まず資料がほぼ実物大で描かれていると判断でき、神代石の特徴を正確に知ることができる点であろう。この点から縄文時代石器の中には微妙なものもあるが、真作と贋作を判断する最大の根拠になる。また出土地が記されていれば、今日その場所を特定することができる、今日知られている遺跡に該当するか否かを判断することができる。

具体的には前稿で記述したとおり、No. 16に描かれている鋳形石についてのみしか同定作業はなしていないが、現物が確認できれば、現在

も考古学で検討しうる資料として扱うことができる。

一方、限界点は同定作業が困難なことにつきよう。二木長嘯の蒐集品以外は散逸してしまっている状況では、描かれた神代石の現物が、今日残されているか否かを判断することさえ難しい。関西大学博物館所蔵品も例外ではないが、残されていたとしても多くは「出土地不詳」として扱われている。よほどその資料に特徴がなければ描かれた神代石を同定していくことは至難である。また、贋作を含んでいる可能性が高いことを指摘したが、実物が確認できないと断定することはできない。

以上、関西大学が所蔵することとなった『神代石之図』上巻のうち、腕輪形石製品を中心として紹介してきた。

### 三、「神代石之図」の原本と写本

#### (1) 『神代石之図』下巻について

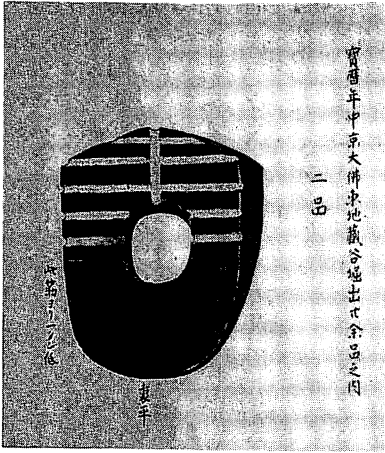
関西大学図書館が所蔵することになった『神代石之図』は上巻であり、当然下巻が存在することが予想された。また、序文に石亭の印がないことから写本であって、原本でないことは明らかである。そこで『国書総目録』及び各図書館の蔵書目録等を手掛かりに『神代石之図』の原本、あるいは写本を求めた。その結果、管見に触れたものは下記のとおりである。

神宮文庫所蔵『神代石之図』乾・坤（以下、神宮本）

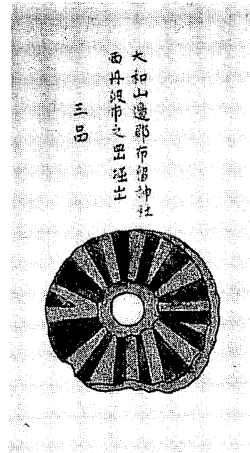
東京大学総合研究博物館所蔵『神代石之図』上・下巻（以下、東大本）

天理大学図書館蔵『石器蒐図』上・下巻（以下、天大本）





図版6 『神代石之図』下巻  
No. 33



図版5 『神代石之図』下巻  
No. 20

国立公文書館蔵『神代石之図』（以下、内閣本）

各卷子本については後述していくこととし、まず神宮本によって下巻の内容を見ておくこととした。

基本的には上巻と同様の体裁であり、五六点の神代石の原寸大模写と出土地・所蔵者及び、若干の所見を記している。後半のNo. 35からNo. 56（下巻も上巻と同様巻頭の神代石から番号を付した）は、石亭が「石剣頭」と呼ぶ、今日の子持勾玉が二点掲載されている。先に示した序文において、石亭自身が語っているように、石剣頭（子持勾玉）を奇古なものとして捉え、集成を試みたものであろう。

さて、石剣頭については、命名の経緯、また用途を含めて論述する必要があるが、当面三十数点の神代石を見ていこう。上巻において分類したように、第1類縄文時代石器、第2類古墳時代石製品、第3類贗作及び不明品の三種類が存在する。上巻と比較して第1類の縄文時代石器が多くを占める。これは現在の新潟県在住の弄石家蒐集品が大部分であり、新潟県における縄文遺跡の多さと比例していると考えられる。越後における弄石家としては、この卷子本の跋文を執筆している鈴木甘井（澁華井甘井）が代表であるが、他に下巻に登場する人物を列挙すると以下のとおりである。「高田光國寺」「奥村順治」「和田七郎左衛門」「信濃屋六右衛門」「河野平八郎」「倉石甚助」の名があり、このうち倉石は八点の所蔵品が掲載されている。その他には木内石亭の所蔵品が一〇点掲載されている。

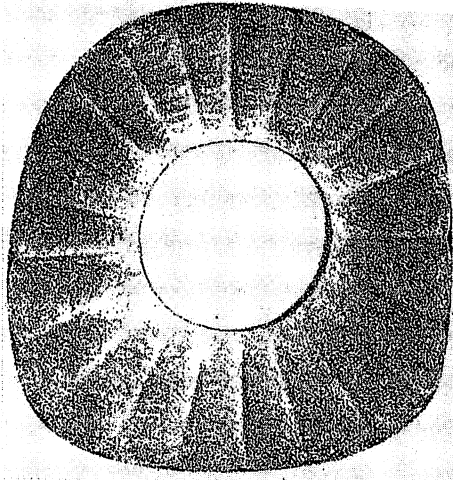
この下巻に掲載されている神代石の中から二、三注目すべきものを取りあげよう。それは前稿において贗作の例としてあげた二点が、ともに

この下巻に所収されていることである。

それは、No. 20にある浣華井甘井が所蔵するとして描かれた神代石である。これが前稿でも紹介した、現在高山市郷土館が所蔵する資料と同一であると見て間違いない(図版5)。その根拠として添えられている記事が「大和山邊郡布留神社丹波市之岡堀出」とあり、実物に添えられている付箋と一致することがあげられる。もちろん形状も一致し、大きさも原寸大に描かれていると判断できる。

もう一点はNo. 33に掲載されている、石亭が所蔵する贋作石製品である。現物は関西大学博物館にあり(図版6)、筆者が最初に違和感を抱いたものである。形状、大きさも一致する。また色彩を実物と比較したとき色調も一致することから『神代石之図』に描かれた図は、忠実に石の色も表現しているものと判断できる。旧稿を執筆した時点ではこの卷子本の存在を知らなかったため、高山市郷土館にある長嘯の描いたと思われるスケッチとの比較を試みた。しかし、この卷子本によってこの贋作が石亭の手にあつたものを確実にすることができた。

このことは、単に卷子本に描かれた神代石の実物が今日同定できたという事実には留まらない。すなわちNo. 20が浣華井甘井の所蔵品とされているにもかかわらず長嘯の手にあり、この事実は浣華井甘井から長嘯への贈答であろうと見ることができ。また石亭の所蔵品のスケッチが、やはり二木の手に残されている。これは越後居住の浣華井甘井、飛騨居住の二木長嘯、近江居住の木内石亭の間の密接な交流を物語る物証であろう。もちろん書状、あるいは往來の記事などで彼ら交流を知ることができるのであるが、実際に神代石の交換、贈答がなされていたことが



図版8 『日本大古石器考』  
第19図 2  
(註8より)



図版7 『神代石之図』下巻  
No. 25

実証できる。同じく下巻に掲載されている石亭所蔵の石棒は、出土地が飛騨であることが記されており、長嘯からの贈答品であろうと想定できる。

その他に下巻所収神代石の中で注目したいものとして、No. 25にある石亭所蔵の車輪石である。絵図は図版7に示たとおりであるが、記された記事は次の通りである。

「大和葛城山麓辨弁天山坂口村掘出 質堅硬  
同物湖南石山密蔵院僧正蔵 出所不明」

この記事のなかで「質堅硬」の文字は東大本では脱落している。また石山僧正蔵とある車輪石は上巻No. 8（神宮本ではNo. 10）に示されている三輪山中出土品を指していると思われる。

さてこの車輪石であるが、神田孝平の著した『日本大古石器考』第19図2に掲載されているもの（図版8）の出土地が同じく「大和葛城」とあり、現在関西大学博物館が所蔵する車輪石と同一である可能性が高い。しかし、この同定作業には今しばらく厳密性を必要とし、また、同地に当該時期の古墳は知られておらず、出土地の確定にも時間を要する。

以上、『神代石之図』下巻を紹介しながら、描かれている神代石のなかから石製品を中心に紹介してきた。下巻については個々の写真が掲載できなかったために、概略の紹介にとどまったが、『神代石之図』の持つ内容、及び意義についての理解が深められたこととしたい。

## (2) 『神代石之図』の原本と写本

現在確認できた『神代石之図』は、前述したように関大本を含めて五

巻である。一応すべての現物を確認したが、写真撮影が未了であり十分比較検討できていない点があることをこわった上で、確認できた事項を記述しておきたい。

まずはじめに、『神代石之図』の原本であるが、これは間違いなく神宮本である。その根拠としては第一に序文の最後にある「木内石亭」のあとに石亭の実印が捺印されていることである。関大本、東大本とともに印は押されていない。また、最後の跋文においても記述した流華井甘井の実印を認めることができる。

よって、この神宮本と関大本・東大本・天大本を比較検討することから、ある程度の写本の系統を知ることができる。

さて、まずこの神宮本と他の写本の違いを確認していくが、No. 10・11に示した「近江長浜大通寺横超院主蔵」と記述されている石棒が、神宮本ではNo. 7の後に描かれており、神宮本ではNo. 8・9になる。関大本も含めすべての写本では、本稿で示したとおりの順序で描かれており、この原本と写本の相違がどの時点で発生したのかについては明らかでない。しかしながら描かれた神代石の特徴、及び記事については全く一致している。

もう一つの大きな違いは跋文の文頭に大きな相違を見つけることができる。すなわち神宮本は「神代石の図を浄写す。しりへに……（後略）」であるのに対し、東大本では「寛政八年の秋、石亭翁の求めによりて神代石の図を浄写す。しりへに……（後略）」とある。すなわち傍線を付した「寛政八年」「石亭翁」などが原本では認められない。この相違も下巻が確認できた天大本でも東大本と同様の跋文である。

この相違点は、原本が澁華井甘井の手元にあったことに起因するのではないかと考えている。神宮本には「神宮文庫蔵書」の蔵書印あるいは前身の「林崎文庫」の蔵書印と共に「澁華井蔵書」の印を認めることができ、この卷子本が澁華井甘井の手元にあったことは明らかである。よってこの原本から写本が作られていく過程で、「いつ」「なぜ」を明らかにするために、「寛政八年」「石亭翁」等の字句が跋文の最後に付加されたと考えられよう。

その他、個々の神代石に関する記述は基本的に共通する。しかしながら原本と東大本を詳細に比較していくと、東大本にはいくつかの欠落が生じている。たとえばNo. 1の「石色不詳」の文字は東大本には認められない。またNo. 4・5などの出土地が、一行書のもので二行にわたっていたり、あるいはその字句が絵図の左側に記述されているなどの違いが散見される。

また逆に東大本のみに見られる字句も存在する。たとえばNo. 6の「大聖寺候蔵 二品」の中の「二品」の文字は東大本のみに見られる。これは写本の過程で、補われたものであると判断できよう。

このようにそれぞれの写本を神宮本と比較しながら、写本の系統をたどることができるのだが、関大本との比較、及びそれぞれの写本の特徴について記述しておきたい。

結論的にいえば、もつとも忠実に原本を写した卷子本は、天大本であるといえる。東大本については描かれている神代石のタッチが弱く、着色も塗ったという表現が当てはまる程度の絵図である。また、下巻になると記述の脱落が目につく。天大本については、絵もうまく文章の脱落

も少ない。また文末の澁華井甘井の印も、実大できわめて丁寧な朱書きによって表現されている。

関大本については、上巻のみしか比較できないのであるが、描かれている神代石は丁寧な、かつ忠実に模写され、またそのタッチも比較的生き生きとしている。ただ、記述については草書体で書かれており、文字の脱落も見られる。あるいは比較的短時間に模写されたためか、単純な誤植も認められる。たとえばNo. 18の所蔵者住所では、原本が「讚岐阿野南郡陶村」あるのに対し、関大本では「讚岐阿野南郡陶村」となり、意味から考えて明らか誤植であると判断できる。同様に解説の字句、たとえばNo. 7の上に書いてある「質青瑤瑤」の文字はNo. 6の石剣についての説明語句であり、書かれてある位置では意味が通じない。このように記述については文末の一字句が脱落している点などがあるが、神代石の模写は、東大本よりもはるかに丁寧であり、たとえばNo. 12の車輪石などでは、放射状凸線の表現が立体的である。

以上大まかに各卷子本の特徴を見てきたが、具体的にこの写本からこの写本へという系統を明らかにするまでには至っていない。もちろん筆者の観察不足に起因するが、『神代石之図』そのものが、図が主であり記述が少なく、文字による系統が明らかにしづらいという難点もあろう。特に絵そのものについては、写本を作った人物の上手下手があり、絵がうまいだけで原本に近いと判断することも早急であろう。

なお、内閣本は天地一四〇ほどの小形の卷子本である。内容は『神代石之図』の上巻と全く同じである。大きな違いは各神代石の寸法が記述してあることである。これは小形の卷子本に写したために、『神代石之

図』の原本に描かれた図の大きさを測り、記述したものとされる。

このような小形の卷子本は、先述したとおり携帯用であろう。この内閣本は木内石亭の草稿本とされているが、文頭の序文に印もなく、絵も稚拙であり、あくまでも携帯用に作成されたものと考えたほうが妥当であろう。換言すれば『神代石之図』は、各神代石を実物大で描いていることの傍証にもなる。

#### 四. おわりに — 神代石の流転 —

以上、本稿では関西大学が所蔵することとなった卷子本『神代石之図』を紹介してきた。筆者の力量不足もあり、原本及び他の写本との書誌学的な考察については十分でないところも多い。

さて、最後にこの『神代石之図』に描かれている神代石の行方について判明している石器類を示しておくこととする。このうち二木長嘯の所蔵品については大半が現在も彼が居住した飛騨高山において保存されている。よって本館が所蔵する遺物を中心に見ていきたい。

既に述べたように、贗作として旧稿で紹介した二点のうち一点（下巻 No. 33）が本学博物館に所蔵されている。また、上巻 No. 16 に描かれている木村兼葭堂が所蔵した鋳形石も前稿で触れたところである。よってこれら以外に確認できた神代石は下記の四点である。

#### 1. 変形石斧（図版 9・10） 『神代石之図』下巻 No. 12

『本学考古室要録』No. 134

#### 2. 両頭石斧（図版 9・11） 『神代石之図』下巻 No. 13

『本学考古室要録』No. 149

#### 3. 独鈷石 『神代石之図』下巻 No. 18

『本学考古室要録』No. 141

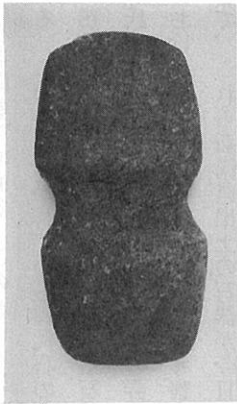
#### 4. 半月形石器（図版 12・13） 『神代石之図』下巻 No. 24

『本学考古室要録』No. 94

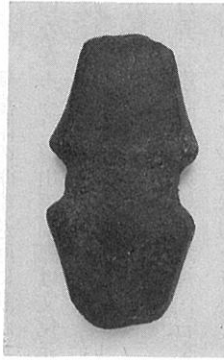
この四点については形状、大きさの記載から見ても間違いなく、図版に示した実物であると判断できよう。このうち 1 から 3 は越後国高田に居住した倉石甚助が所蔵していたと記述されていたものである。出土地については越後国魚沼郡中之嶋下船戸村との記述がある。3 は信濃産所路不詳とあり、細かな出土地は特定できない。4 は澁華井甘井が所蔵しており、越後国頸城郡可児村という出土地が記述されている。

これらが『本学考古室要録』にも収録されているのだが、この図書が刊行された時点で、4 については出土地が越後と記述されているが、その他三点は出土地不詳として扱われている。今回『神代石之図』を検討していくことによって、これら遺物の出土地を明らかにできた。具体的な遺跡名、あるいは出土状況などは不明であるが、少なくとも出土地不詳の遺物から、今日の考古学的考察に耐えられる遺物とすることで可能性が高まったといえよう。

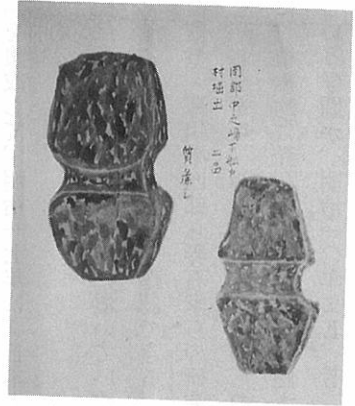
この『神代石之図』に掲載された資料以外にも、本学博物館が所蔵する石器類が江戸時代の卷子本に描かれている。このことについては既に新潟県在住の小島正巳氏が指摘されている<sup>⑧</sup>。その卷子本とは、越後国頸城郡に居住した河倉亭と称した渾川平四郎が収集した神代石を掲載した



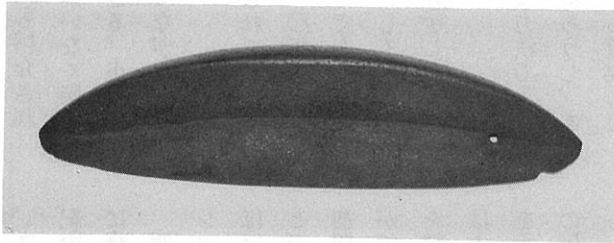
図版11  
『本山考古室要録』  
No. 149  
両頭石斧



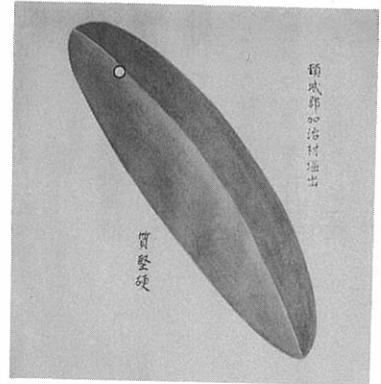
図版10  
『本山考古室要録』  
No. 134  
変形石斧



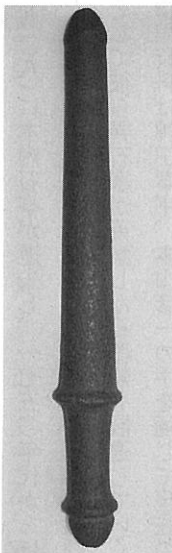
図版9 『神代石之図』下巻  
No. 12(右) 13(左)



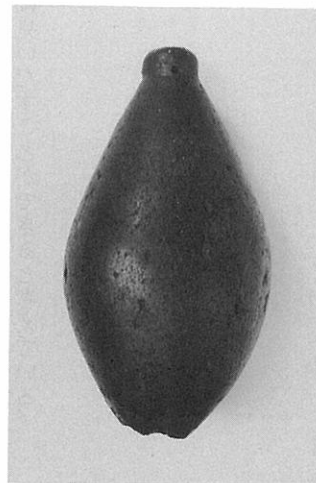
図版13 『本山考古室要録』 No. 94  
半月形石器



図版12 『神代石之図』下巻  
No. 24



図版15  
『上古石器図巻』  
No. 49  
『本山考古室要録』  
No. 248



図版14  
『上古石器図巻』  
No. 19  
『本山考古室要録』  
No. 87  
磨製乳棒形石器

『上古石器図巻』である。この卷子本については小熊博史氏も紹介されている。<sup>①</sup>この中に描かれている神代石のうち数点は、まちがいになく図版14・15に示した本館博物館が所蔵する石器であると判断できる。小島、小熊氏とも地元に住じた江戸時代の弄石家の足跡をたどりながら、地域における考古学史について緻密な考察を加えられている。

さて、これら新潟県出土の石器が今日本学博物館に所蔵されている経緯は、小島氏が既に指摘しているように、神田孝平が明治一〇年に文部小輔として、新潟県の学事巡回に訪れた折りに入手したものであることは間違いないであろう。渾川平四郎は文化元年（一八〇四）に逝去しており、その後約七〇年間は子孫宅に残されていたものを、神田が入手したものではなからうか。

神田は弄石家諸氏の蒐集した神代石を、明治初期に様々な方法で入手したと思われる。その基本的な方法とは、もちろん購入であろうし、あるいは寄贈されたものも含まれるであろう。神田孝平はこれら蒐集した石器類を集成して、明治一七年に『日本大古石器考』を上梓するに至ったのである。

神田は多くの卷子本も手元に置いていたことが、現在東京大学総合研究博物館に残された史料から確認できる。おそらく神田自身、木内石亭・木村兼葭堂・渾川平四郎ら弄石家らの研究成果を承知していたと思われる。しかしながら、明治初期の西洋からの学問導入という社会的風潮のために、積極的に弄石家らの活動を評価することはなかった。それは考古学という学問が、明治一〇年にE. S. モースによって学問として我が国広められていく状況と軌を一にするものであろう。

文化五年（一八〇八）に木内石亭が逝去し、一七五〇年代からはほぼ半世紀の間興隆した、物産学の一流派に位置付けられる弄石会の活動も一気に衰退する。そして彼ら弄石家が蒐集した石器類も散逸していく。

関西大学博物館資料は神田孝平、本山彦一の手を通じて現在のコレクションが形成されている。今回『神代石之図』を検討していくことから、ほぼ二〇〇年の時を経て、弄石家の収集品を本学の博物館で確認することができた。このことは木内石亭らの研究成果を、神田孝平という明治初期の考古学者を介して、江戸から明治の考古学史の一端に触れることができたといえよう。先に述べたように明治一〇年にモースが大森貝塚を調査し、我が国の考古学がスタートしたとされる。しかしその背景には木内らの弄石家、あるいは神田らの研究成果が連綿と続いていることを承知しておくべきであろう。そして、関西大学博物館が所蔵する資料の価値を、この点に見いだすことができると考えている。

〔註〕

- ① 長谷部言人「神代石」『考古学雑誌』第三〇卷一〇号 一九四〇年  
日本考古学会
- ② 小島正巳「越後妙高山麓における考古学の先達」『新潟考古』  
第九号 一九九八年 新潟県考古学会  
なお、「浣華井甘井」の名については、「浣華井井井」「鈴木甘井」など  
の表記があるが、本稿では「浣華井甘井」に基本的に統一した。
- ③ 清野謙次『日本考古学・人類学史』上巻 一九五四年 岩波書店
- ④ 斎藤 忠『木内石亭』人物叢書 一九六二年 吉川弘文館
- ⑤ 徳田誠志「関西大学博物館所蔵 旧木村兼葭堂所蔵の鋏形石―奈良県  
島の山古墳の出土品―」『関西大学博物館紀要』第3号 一九九七年
- ⑥ 斎藤 忠『日本考古学史資料集成』1江戸時代 一九七九年  
吉川弘文館
- ⑦ 註6に同じ
- ⑧ 神田孝平『Notes on Ancient Stone Implements & C. of Japan』(日本語  
版『日本大古石器考』) 一八八四年  
図版8に示した車輪石の説明文は、以下の通りである。  
「Similar to Fig.1. Locality of discovery, "Katuragi-yama in Yamato」
- ⑨ 末永雅雄『本山考古室要録』 一九三五年 岡書院
- ⑩ 註2に同じ
- ⑪ 小熊博史「北越頸城河倉亭画『上古石器図巻』考」『甘粕 健先生退官記  
念論集 考古学と遺跡の保護』一九九六年 同論集刊行会